九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

倉橋由美子におけるわが子を食らう母親 : 「婚約」を中心として

劉, 苗苗
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/1518293

出版情報 : Comparatio. 18, pp.50-61, 2014-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

倉橋由美子におけるわが子を食らう母親
――「婚約」を中心として――

劉　苗苗

【はじめに】

倉橋由美子は初期作品の中で、妊娠を拒否する、あるいは妊娠しても中絶するという主人公を何人も登場させている。例えば、「パルタイ」（『明治大学新聞』一九六〇年一月）では、《労働者》と何度も交わり続けた結果として、女主人公「わたし」は妊娠することになる。「こどもが欲しい」という《労働者》に、「子どもを生むことができる」が、「わたしはそういうつもりはなく、処分しよう」とはっきりと妊娠中絶の意思を示す。また、「蛇」（『文学界』一九六〇年六月）において、倉橋は男が妊娠するという大胆な発想を駆使し、男女関係において弱い立場にある女性が体験するはずの出来事を男性に体験させ、女性の「第二の性」としての立場を強く訴えると同時に、母性への嫌悪を示す。妊娠を拒否するにせよ、男女関係が逆転し、男が妊娠する体質になるにせよ、いずれも倉橋初期の「性関係のうちには不条理にも女の妊娠という生殖の罠が待ちうけている。そして子どもを生むことは結局家庭をつくるという形式にすべりこむことを意味する」（注一）という認識と深く関わっていると考えられる。また、倉橋は「婚約」（注二）（『新潮』一九六〇年八月）という作品において、母親がわが子を食べるというグロテスクな話を登場させている。倉橋作品のなかで、母親がわが子を食べるモチーフが用いられるのはこの一例しかない。

「婚約」は一九六〇年『新潮』の八月号に発表された、カフカの伝記的事実をもとに書いた作品である。翌年の一九六一年二月に「鷲になった少年」（『週刊朝日別冊』一九六一年二月号）「どこにもない場所」（『新潮』一九六一年一月号）という二作とともに、新潮社から刊行された『婚約』と題された単行本に収録された。粗筋は以下のとおりである。ある十一月の小雨の降る午後、役所勤めのKのところに、F・Bの代理人と自称する女がやってくる。KはF・Bと会った覚えがないにも関わらず、持ちかけられた婚約の件に同意する。それだけでなく、「F・Bさんをあいしてい」ることを伝えてほしいと代理人に何度も頼む。後の出版記念会でF・Bと出会い、お互いに婚約（契約）について条件を述べ、合意に達する。しかし、Kが失業することにより、婚約手続きを実行するに当たって、前提条件となる保証金の交換が大きな壁となる。婚約手続きがうまくいかず、妊娠したF・Bからの誤解を解くため、Kは彼女のあとを追い、別荘行きを決める。その途中自分の作品を翻訳すると申し入れるミレナに出会う。Kが別荘を訪れ、弁解するにも関わらず、F・Bの理解を得ることができない。そのうえ、Kは喀血が進行したため、ミレナに病院に入れられる。そして入院先に訪ねてくるF・Bに子供を「処分しました。食べましたわ。」と真実を告げられ、死を迎える。

妊娠しても中絶するという選択肢もあるにも関わらず、倉橋は

「婚約」において、なぜF・Bにわが子を食べさせたのか、母親がわが子を食べるモチーフをどこから取り入れたのか、またそのモチーフを通して倉橋は何を意図しているのか。こうした疑問を解きほぐすために、F・Bがわが子を食べる経緯を明らかにした上、わが子を食べる親のイメージの受容についていくつかの可能性を検討しながら、その食べる行為の背後にある倉橋の真意を解読したい。

一、母親がわが子を食べる経緯

Kが保証金集めのために作家の仕事に没頭する間、F・BはKが婚約手続きを積極的に進めておらず、自分を裏切っていると見なし、別荘に向かう。自分の妊娠が分かった後、Kに手紙を出し、裏切り者と非難する。Kが別荘を訪ねると、F・Bは豚など家畜の飼育をKにおしつけ、自分は二階に閉じこもる。その後ある日、二人の間に以下のような会話が交わされる。

「だめよ、だめですわ、あがってきては。いまとても恐ろしいかっこうをしているんですもの。こうして鉤をつかんでいる手をごらんになってもわかるでしょ？ほら」

「まったくだ。鬼の手みたいだ」とKは叫んだが、じっさいそんなふうだった。

「それにお産をしたところなのよ」

「おお、ぼくの子どもを……？」

「いいえ、猫ですわ。おそらくこれが最後のお産でしょうね。ずいぶん苦しそうですわ」

「だいじょうぶですか？」

「ええ。すっかり食べちゃったのよ。子どもも胎盤も」（「婚約」一七二頁）

当初F・BはKに事実を明かさず、子も胎盤もすっかり食べたのは猫とした。Kはそれを少しも疑わなかった。その真実が明かされるのは、Kが病院に入れられた後のことである。

「あなたにお産のこと、いわなかったかしら？」

「おお、おもいだしましたよ。猫のお産のことですね」といいながらKはベッドのうえで海老のようにからだを曲げて大きな痙攣をおこしていた。

「どうなさったの？」とF・Bはいったが部屋の中央に立ったままだった。「わたしも猫とおなじようにしたのよ」（「婚約」一七九頁）

F・Bは婚約手続きが順調に進まないことをKが婚約に前向きでない証と見なし、自分への裏切りであると結論づける。また、「わたしと婚約してどうなさるおつもり？」というLの疑問に、Kは「いまいったようなこと（家庭をつくること―引用者注）を実現すれば、ぼくにも世間へはいっていくための入場券が与えられるかもしれない」（「婚約」一五五頁）と答える。即ちKは結婚と引き換えに、世間復帰のきっかけを手に入れようとしているので

ある。そのため、F・BはKが自分を妊娠させたのは、婚約せずに世間復帰をするために自分にしかけた罠だと思い込む。

二、親が子を食べる行為の受容について

「婚約」に見られる子を食らう母親を論じる際には避けて通れない、「子どもを食べる」というモチーフについて考えてみたい。古来、東西の文学や絵画に同様のモチーフが見られる。

① わが子をくらうクロノス（サトゥルヌス）（ギリシア・ローマ神話）

大地母神ガイアはウーラノスが自分に反抗した息子キュクロープスたちをタルタロスへつきおとしたことを怒って、巨人たちをそそのかして父ウーラノスを襲わせた。そこで末子クロノス（注三）が父を去勢し、その支配権を奪い支配者となったが、さきにタルタロスに投入された者たちを連れ戻しながら、ふたたびタルタロスに投じた。クロノスは姉のレアーを妻とした。クロノスは自分の息子の一人に主権を奪われるであろうというガイアとウーラノスの予言を恐れて、生まれた子を次々と呑みこんでしまった。レアーは怒って、ゼウスが生まれた時、石を襁褓でくるんで生まれた子のごとくに見せかけ、クロノスに呑むように与え、ゼウスをひそかに育てた。ゼウスが成長すると、レアーからもらったからしと塩を蜂蜜いりの飲み物のなかに混ぜ、クロノスに飲ませ、呑み込んだ子供らを吐き出させた。（注四。傍線は引用者。）

② 「我が子を食らうサトゥルヌス」（絵画作品）

絵画作品にも、わが子を食べる主題が扱われ、「わが子を食らうサトゥルヌス」（オランダ画家、ルーベンス）と「わが子を食らうサトゥルヌス」（スペイン画家、ゴヤ）と二つの名作が残されている。別荘の「聾者の家」の壁画として描いた一四枚の「黒い絵」の一点でもあるゴヤの作品が描かれたのが病により聴覚を失った後、七七歳のときであり、それに先行する一六世紀のルーベンスの絵画からの影響が大きいと思われる。

図1　フランシスコ・ゴヤ
「我が子を食らうサトゥルヌス」
１８２１年～２３年　プラド美術館所蔵
図１は『名画で読み解く「ギリシア神話」』（吉田敦彦、世界文化社、２０１３年７月、２３頁）所収のものによる。

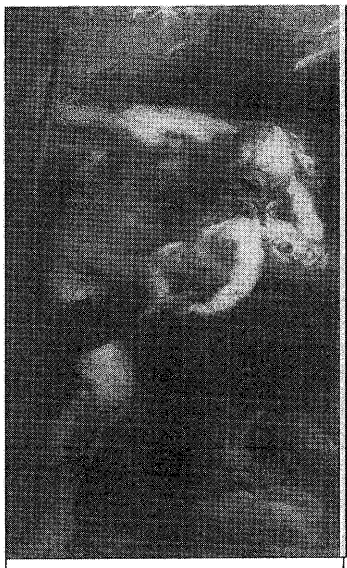

図２　ピーテル・パウル・ルーベンス
「我が子を食らうサトゥルヌス」
１６３５年～３８年　プラド美術館所蔵
図２は『図説ギリシア・ローマ神話人物誌』（マルコム・デイ、山崎正浩訳、創元社、２０１１年４月、２０頁）所収のものによる。

ゴヤにも影響したと思われるルーベンスの同じ主題の絵では、子供は食べられる直前で、顔をしかめて必死にもがいている。こ

れに対しゴヤのサトゥルヌス（注五）では、子供はすでに頭や片腕が食べられてしまっており、そこからしたたり落ちる生々しい血、振り乱した髪やかっと見開いた錯乱状態の眼などは、鬼気迫るものがあろう。

この二作はいずれも、ローマ神話に登場するサトゥルヌスが将来、自分の子に地位を奪われるという預言に恐れを抱き、五人の子を次々に呑みこんでいったという伝承をモチーフにしている。それに対して、「婚約」においては、F・BはKに復讐するため、わが子を食べるという極端な行動にはしったと考えるのが自然であろう。その復讐の原点となるのは、Kに子供を社会復帰への道具として利用されたくないという心理だと考えられる。何かに恐れを抱き、わが子を食べるという点においては、預言を恐れ、わが子を次々と食べてしまうクロノス（サトゥルヌス）の話と類似性を見出すことができる。したがって「婚約」におけるわが子を食べる親というモチーフはギリシア・ローマ神話におけるわが子を食らうクロノス（サトゥルヌス）から影響をうけた可能性が大きいと考えられる。

③ テーレウスとプロクネーとピロメーラー（ギリシア・ローマ神話）

アテーナイ王パンディーオーンは、国境に関する紛争で、トラーキア王テーレウスの調停によって有利を得たので、テーレウスにプロクネーを与えた。やがて二人のあいだにイテュスが生まれたが、テーレウスはパンディーオーンの末娘ピロメーラーに恋し、プロクネーが死んだと偽って、彼女を迎え、犯した。事情を知ったプロクネーが告げることができないように、その舌を切りとった。しかし彼女はピローメーラのために用意された花嫁衣装の模様に秘密の言づてを織りこんで自分の不幸を告げた。ピローメーラはプロクネーを救い出し、「ああ、あなたが死んだなどといつわって私を辱しめたあの男テーレウスに、なんとして仕返しをしてくれよう！」と悲歎にくれて言った。心中怒り狂っていたプロクネーはテーレウスとよく似ていた息子のイテュスを目のあたりにして、復讐の方法を思いつく。「イテュスを殺してそのはらわたを抜き、銅の大斧のなかで死体を煮て、帰ってきたテーレウスの食膳にそなえた」（注六）のである。

④ 『タイタス・アンドロニカス』（シェイクスピア）

わが子を食べるモチーフはシェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』にも語られている。『タイタス・アンドロニカス』は、ローマでかつて絶大なる権力を誇った武将タイタスの復讐悲劇である。その復讐の場面は以下のように描かれている。

タイタス　ようく聞け、悪党め、きさまらをどう料理してやる。
おれはこの残っている片手できさまらの喉笛を
かき切ってやる、ラヴィニアは切り株の両手で
盥をささえ、きさまらの罪の血をそれに受ける。
知ってのとおりきさまらのおふくろは食事にくる、
復讐の女神を気どり、おれを気ちがいだと思ってな。
ようく聞け、悪党め、おれはきさまらの骨を粉にひき、
それをきさまらの血でこね合わせて練り粉にし、

その練り粉でパイの皮をこさえ、その皮のなかに
きさまらの恥知らずな生首を入れて二つのパイを作り、
あの淫婦に、きさまらの汚らわしいおふくろに、
食わせてやる、自分が生んだものをのみこむ
大地のようにな。これがおれの招待した宴会だ、
これがあの女にたっぷり食わせてやるごちそうだ。（注七）

『タイタス・アンドロニカス』において、タイタスはタモラに、彼女の息子の肉で作ったパイを食べさせるという陰惨な復讐行為を遂行する。その復讐行為は前述したギリシア・ローマ神話におけるプロクネーが夫に自分の子供の肉を食べさせるという復讐方法の模倣とされる。また、その陰惨な復讐行為によって、タモラは我が子を貪り喰う母親となる。

シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』はテーレウスとプロクネーとピロメーラーの話を起源とする復讐物語とも言えよう。それに対して、前にも述べたが、「婚約」におけるF・Bがわが子を食べる行為はKへの復讐行為であると考えられるため、復讐を目的とする点や、わが子を食べるというモチーフが登場するという点においては、テーレウスとプロクネーとピロメーラーの話を代表とする復讐物語と、「婚約」との類似性を見出すことができる。しかし、ギリシア・ローマ神話における復讐物語にはわが子を食べる親が登場するが、いずれも騙された状態でわが子を食べている。そのため、自発的にわが子を食べるF・Bの行為を解釈するには、テーレウスとプロクネーとピロメーラーの話だけでは、解釈しきれない部分が残る。

⑤　子を食らう餓鬼

田村正彦の「子を食らう餓鬼―西行の和歌と唱導―」によれば、日本の文学作品においても子を食らう餓鬼というモチーフが用いられていることが分かる。田村は前掲論において、西行の和歌と唱導家の言説を中心に考察し、餓鬼にも母親の心情があったことを積極的に見出そうとした。またそれに続き、「子を食らう餓鬼―図像の流布とその背景―」において、経典類に限らず、絵画作品や記録史料なども考察の対象に入れ、「子を食らう餓鬼は、悪因悪果を体現する存在として経典に生まれ、日本では源信の『往生要集』を基幹として、文学作品や仏教書の中で独自の受容がなされていった」（注八）と指摘している。

また、子を食べるという行為は、子を食らう餓鬼に限ったものでなく、人間界の出来事としても、たとえば飢えに迫られわが子に手を掛ける「曠野子肉」をはじめとする経典類や、現実問題としての飢饉の食人記事などもかなり残っていると、飢饉との関係性を明言している。その上で、飢饉の時のような極限状態にある場合、非人間的な行為であるが、わが子を食べるというケースがありうることを肯定しながらも、それについての言説の背後に説法や絵解きの影響が働き、虚実入り交った記述に間違いないであろうとその虚構性を示唆している。

倉橋由美子の関心を考慮すると、アメリカ留学を境目に創作活動も大きな変貌を呈し、初期の西洋文学志向から日本古典への回帰が顕著に読み取れる。初期は文壇の主流であるリアリズム文学

に反感を持ち、反リアリズムの文学こそ真の文学と叫ぶ倉橋であるから、「婚約」が執筆された当時の倉橋の関心を考えると、日本文学でなく、ギリシア・ローマ神話から素材を取り入れる可能性が高いと考えられる。

いままで述べてきたように、何かに恐れを抱き、わが子を食べるという点において、F・Bの行為は預言を恐れ、わが子を次々と呑みこんでしまうクロノス（サトゥルヌス）と類似している。また、わが子を貪り喰うのが母親である点や、復讐心理が働いているという点において、シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』と似通っている。しかし、片方をもってF・Bの行為を解釈するにはいずれも解釈しきれない部分が残るため、クロノス（サトゥルヌス）の話と、テーレウスとプロクネーとピロメーラーの話がともに影響したと考えるのが妥当であろう。

三、なぜネコなのか？

ア、ネコというシンボルの象徴的意味

『イメージ・シンボル事典』によれば、他のすべての重要な象徴と同じく、ネコも月の側面と太陽の側面という両義性を合わせ持つものとされる。しかし主に太陽の側面を表すライオンと比較して、ネコは月の側面を表すことのほうが多いとされる。

［月の側面］1、北西ヨーロッパでは、（月の）豊饒の太女神は、穀物の精としてネコの中に宿ることがある。月とネコを結びつける特徴がいくつかあり、まず、その目は暗闇の中で光ることがあげられる。そして月が欠けるにつれ細まって行く。ネコはネズミ（ペスト）を食べる。大っぴらに交尾することにより、月の女神は婚姻の擁護者になることもあり、またその敵対者となることもある。仔を多く孕むが、その仔を食ってしまうことがある（雌ブタと同じく、月の女神の化身の一つ）。フクロウが夜中に音をたてずに飛ぶように、足音をたてないで歩く。月の女神の色と同様、ネコは白、茶、黒の色をもつ。［狐物語］に登場するネコは奇妙な去勢を受けた。死を俯瞰する月―ネコとして、月の女神の化身となっている。2、処女である月の女神ディアナーアルテミスは、テュポンを恐れてネコに姿を変え、他の神々とともにオリュンポスからエジプトへ避難した（オビディウス『転身物語』）。ヘカテ（乙女アルテミスの老婆としての姿）もネコに姿を変えたが、彼女は魔力をもつ月の女神である。3、（太陽と結婚した）チュートン族の女神フレイアは、二匹のネコに戦車を引かせた。彼女も魔力をもつ女神だった。4、ヘビ、クマ、ワニと同じく、ネコはコレとその母（ケレス）の両者が動物の姿をとって現れたもの（ユング）。（注九）

また、ジャン＝ポール・クレベールは『動物シンボル事典』において、ネコと女性のイメージとの関係性を以下のように説明している。

月の象徴である猫は、エジプトにおいて、さまざまな信仰の

対象であった。（中略）キリスト教徒たちはどうかと言えば、彼らは猫を白眼視していた。猫はあらゆる魔力の元凶であるとされた。一六世紀のグノーシス派において既に、猫は女性の持つあらゆる魔性に関係づけられていた。猫は女であり、男は犬である、と彼らは言う。猫は女の本性、女の官能、女の優美、女の狡猾をすべて持っている。猫の毛が既に性の欲望を駆り立てるものだ。現代のフランス語はその伝統を引き継いで、女性性器を「牝猫」（chatte）という名で呼ぶ。

そればかりか、猫は民間信仰において早くから魔術と結び付けられていた。魔女が好んでよく猫（当然牝猫）に変身する。猫はまた悪魔の化身とされた。（注一〇）

『イメージ・シンボル事典』では、猫が月の女神の化身の一つ、また魔女に仕えるものとして、神話に登場すると指摘される。それに対して『動物シンボル事典』では、「猫は女であり、男は犬である」というグノーシス派の主張を紹介した上、猫を悪魔の化身と強調している。女性を動物にたとえる場合、女の本性、官能、優美、狡猾をすべて持っているとされる猫が最初に浮かび上がるであろう。また、民間信仰において猫は悪魔のイメージを帯びていることを考慮すると、女＝猫＝悪魔という図式は成り立っても差し支えないであろう。さらに、倉橋は仏文科を専攻していたことを考えると、女性性器を表すchatteが「牝猫」を語源にしていることからヒントを得る可能性は高いと考えられる。

イ、　動物界における子動物を食べる親動物

動物行動学者であるテンプル・グランディンとキャサリン・ジョンソンは動物の攻撃性を「捕食性攻撃」と、「情動つまり感情による攻撃」と二種類に分けたうえ、「情動による攻撃」のさまざまの型を、さらに攻撃を誘発する刺激によって細分化し以下のようなリスト（注一一）を作成している。

リスト1、「情動による攻撃」についての区分

① 積極的攻撃―支配性の攻撃、なわばり攻撃等
② 恐怖に駆られた攻撃―幼い子を守ろうとする母性による攻撃等
③ 痛みによる攻撃
④ オス間の攻撃―オス間の攻撃はテストステロン値の影響を受ける。
⑤ いらだちによる、あるいはストレス性の攻撃―これにはとばっちり攻撃がある。猫が、外にいる猫をみて興奮しても近づけないときに、かわりに家の中にいるべつの猫、あるいは人間を襲う場合。
⑥ 混合型の攻撃―たとえば、恐怖が積極的な攻撃と結びついた場合。
⑦ 病気による攻撃

グランディンとジョンソンは母性による攻撃を恐怖の部類にいれ、「母性による攻撃は、本質的には、恐怖に駆り立てられているのだ」「動物の母親は、赤ん坊の身が危険だと考えると恐怖を感じ、恐怖が攻撃につながる」（注一二）と指摘している。また、ストレ

ス性の攻撃を説明する時、「ストレスの高い状態で暮らしている動物は、適度におだやかな状態で暮らしている動物と比べると攻撃的になりやすい」とし、その具体例として、「ボーダーコリーが自分の子犬を全部たべてしまった」（注一三）という悲惨な話を取り上げている。

わが子を食べる親猫を考えるにあたって、その可能性として、恐怖による攻撃とストレス性の攻撃とを結びつけて考えることが可能であろう。親猫と子猫の関係を考慮すると、母性による攻撃に当たる。しかし、本来恐怖に駆り立てられ、攻撃につながる母性の攻撃が外に向かうものである。ここでの恐怖は母親が赤ん坊への分離不安に由来するものであると考えられる。そうだとすれば、わが子を食べる親猫はなぜその攻撃の矛先を外ではなく、うち（わが子）に向けるようになるのか。「ストレス性の攻撃」の例として紹介される「ボーダーコリーが自分の子犬を全部食べる」という話を見ると、攻撃をわが子に向けるケースもあることがわかる。

親猫がわが子を食べる行為は恐怖による攻撃とストレス性の攻撃とが結びついた混合型の攻撃と考えるのが妥当であろう。すなわち、分離不安による恐怖が攻撃に繋がり、またストレスのため、外に向けるはずの攻撃がわが子に向かうようになり、わが子を食べる行為が成り立つ。

四、食べる行為についての分析――他者との境界線と同一視

胎児との関係について、以下に述べるように、主体（母体）と他者（胎児）との関係という枠組みの中で、疎外・分離と同一化の過程を辿っていると考えられる。

ア、　他者との境界線

「婚約」において、Kは妊娠したF・Bを追いかけて、別荘まで来たにもかかわらず、F・Bは二階に閉じこもったまま、終始降りてこなかった。

うす暗い階段の上の方から、喘ぐようなしわがれ声がした。「Kですよ」といい、かれは階段をかけあがろうとしたが、階段はなかほどで折れて、上半分は骨折した脚みたいにぶらぶらして垂れさがっていた。そのとき、F・Bらしい顔がみえ、竹製の梯子がKのまえにおろされた。（「婚約」一六八頁）

「とにかく、あなたには下で家畜といっしょにくらしてもらうほかありませんわ。この部屋には絶対にあがってこないでちょうだい。豚や山羊だってあがってこないんですからね。」（「婚約」一七〇頁）

この時点から、F・B自身は外界から隔てられ、内的世界の内側で、ひたすら胎児と向き合うことになる。しかしそれはまた同時に、Kとのつながりを絶つということでもある。また、F・Bが妊娠した腹部をKに見せるシーンがあり、そこでは胎児を他者と見なし、他者に対する嫌悪感が赤裸々に描写されている。

F・Bはいきなりその服をめくりあげた。「あなたのためにわたしは妊娠してしまったのよ。これがどんなことか、眼から汗がでるまでよくごらんになるといいわ」

Kは、丸々と張りきった肉、しかも褐色の運河に似た条痕が縦横に走っている神聖とも猥雑とも言いようのない肉の塊を見た。それは呼吸のたびに、見苦しいほど露骨にせりあがってくるのだった。(「婚約」一六九頁)

「丸々と張りきった肉」、「褐色の運河に似た条痕が縦横に走っている」、「見苦しいほど露骨にせりあがってくる」といった妊婦の身体がグロテスクに歪められている表現から、割り込んできた異物—他者(わが子)に対する嫌悪が顕著に読み取れる。しかし、なぜKに裏切られたという思い込みに由来するものと考えられる。

KとF・Bの婚約時に交わされた条件を見ると、F・Bと婚約を結ぶことによって、社会復帰を図るKの姿を見ることができる。Kが婚約を延々と延ばすことから、F・BはKに対して不信感を持ち、さらに偶発的に妊娠したことが分かった後、その不信感が募り、裏切られたという思い込みに繋がっていく。Kの行為を自分との婚約をしないまま、子が生まれてくることによって社会的自己実現を図っていると見なす。

しかし、他者嫌悪といっても、他者が身体の一部である母胎にあるため、主体と他者との境界線があいまいである。それが出産という行為を経て、母胎にあった子が完全なる他者となる。この過程が分離に当たる。主体と他者との境界線が体内から体外になることによって、あいまいな境界線もあいまいでなくなる。しかし母親が子を食べるという行為によって、子がまた体内に取り入れられ、境界線がなくなる。つまり子がその境界線を二度行き来していると考えられる。

イ、食べる行為と同一視

前にも述べたが、動物行動学の観点から言えば、親猫がわが子を食べるようになるのは、子猫が他人に奪われるという恐怖とストレスに由来するものとされる。ここで、F・Bがわが子を食べるのも同じ恐怖とストレスに由来していると解釈したい。F・Bが、Kが自分に妊娠させたのは、結婚をしないまま、子どもの存在を通して自身の社会的価値を獲得するためであると見なしている以上、自分を裏切った復讐として、その子をどうしても渡せないという思惑があっただろう。食べるという行為は、子供(他者)を母親の体内に取り入れ、自分自身に同化させる行為と推測される。

フロイトによって提出された概念には同一視というものがあり、フロイトの解釈によると、次のようなものである。

われわれは、この三つの源泉から汲みあげて学んだことを、次のように要約することができよう。第一に、同一視は対象にたいする感情結合の根源的な形式であり、第二に、退行の道を

たどって、同一視は、いわば対象を自我へ取り入れることによって、リビドー的対象結合の代用物になること、第三に、同一視は性的衝動の対象ではない他人との、あらたにみつけた共通点のあるたびごとに、生じうることである。（注一四）

この三つの特徴を踏まえると、F・Bが胎児を自身と同一視していることが容易に読み取れる。胎児が母体から出る瞬間に、完全なる他者となる。主体の自我が、胎児に、Kによって利用されようとしているという自身と同じ状態に置かれるという類似点を見出し、その点において典型的な同一視が形成される。また、松岡努は「自己愛的同一化と死のイメージについて　―安部公房『無関係な死』を素材として―」において、同一化（同一視）の概念について、二つの段階に分かれることを述べている。

外側にあるものを自分の内側に持ちこむという心理的操作は自他の区別が不分明である発達初期からはじまり、自他の区別が確立された上で取り入れられるようになるまで、さまざまな形態が考えられる。そのため、前者を一次的同一化と呼び、それと対比する形で後者を二次的同一化と呼ぶことで両者の差異を明確にしようとしたり、同一化以前の自我境界のあいまいな程度に応じて、のみこみ（体内化）、取り入れという用語を別立てにして、のみこみ・取り入れ・同一化の三つを包括している内在化という用語で取りまとめるなどといった概念上の工夫がなされてきた。（注一五）

主体と他者との区別が分明であるかどうかによって、同一化は一次的同一化と二次的同一化に分かれている。一次的同一化を発達初期とし、自他の区別が確立された上で取り入れられる、すなわち二次的同一化になるまで、さまざまな形態があるとされる。そして、同一化に至るまでの過程をのみこみ・取り入れ・同一化の三つを包括している内在化という用語で取りまとめている。

また、フロイトは同一視を論じる際、食人種にも言及している。「同一視は、まさしく最初からアンビヴァレント（両価的）であって、それは温情の表現にもなれば、排除の願望にもなりうるのである。同一視は、リビドー体制の最初の口唇期（Orale Phase）の流れを汲んでいるのであって、欲望と尊重の対象を食べることによって同化し、またそのようにして対象を亡ぼしてしまう。食人種がこの立場にとどまっていることは知られている」（注一六）とあるように、フロイトは食人種の食人という行為を同一視とし、その食人行為を対象を亡ぼすにとどまっていると解釈している。

「婚約」において、F・BとKが婚約を結ぶにあたって条件を出し合うとき、F・Bが毎食肉を出して欲しいと肉への強い執着を示す。それに、Kが「特別大きな歯をお持ちなんですね」といい、F・Bの口の中に手を突っ込んで歯に触ってみて、「すごい歯だ。まるで犬の歯みたいだ」と感激するシーンがあるように、F・Bの歯の丈夫さが尋常ではない。肉への執着と歯の丈夫さが後にわが子を食らうことを示唆しているのであろう。また、それらは食人種のイメージに繋がる箇所といっても差し支えないであろう。

しかし、フロイトは食人種の食人行為を同一視の範疇に入れながらも、それを対象を亡ぼすにとどまっていると指摘しているため、もしF・Bがわが子を食べる行為を食人行為と捉えるならば、F・Bの食べる行為も対象（わが子）を亡ぼすにとどまっていることになる。その解釈は果たして成り立つのであろうか。

食人は食べることによって、犠牲者のエネルギーを体内に取り込み、自分自身へと同化させる行為である。その点においては、F・Bの食べる行為もそれと同じと考えられる。しかし、F・Bはわが子が奪われる恐怖、不安によって、もともと身体の一部である胎児を食べることによって、主体の身体に還元することになる。それは単純に亡ぼす行為にとどまらず、身体の一部として再生することになる。また、「イメージ・シンボル事典」に「墓は変容を表す。また再生を願って、もとの状態へ退行することを表す（墓 tomb は子宮 womb と関連する）」（注一七）とあり、また「子宮 womb と墓 tomb との関連」について、I may be plucked into the swallowing womb of this deep pit, poor Bassanius' grave. 俺の方がこの深い穴の吸い込むような胎内へ引きずりこまれてしまうかもしれない、バッシアナスの墓穴の中へ（『タイタス・アンドロニカス』）」の例が引用され、「D・トマスの詩には、いたるところにこの例がみられる」（注一八）とあるように、墓と子宮との関連性が指摘されている。そのため、F・Bの食べる行為は「異物」を亡ぼすというよりむしろ、身体の一部を体内に取り入れることによって、死と再生が循環すると解釈できるのではないか。

【おわりに】

倉橋の「婚約」における「わが子を食べる母親」の造形の由来や「食べる」行為の意味について考察してみた。造形の由来のいくつかの可能性を考えながら、「婚約」が執筆された当時の倉橋の関心を考えると、ギリシア・ローマ神話から素材を取り入れた可能性が高いと考えられる。また、具体的に言うと、クロノス（サトゥルヌス）の話とテーレウスとプロクネーとピロメーラーの話から影響を受けたと考えられる。

F・Bは当初子を食べるのを猫とした。なぜかというと、女性の本性、官能、優美、狡猾をすべて持っているとされることや悪魔の化身という民間信仰が働き、女＝猫＝悪魔という図式が成り立つと思われる。一方、動物行動学の観点に立つと、親猫がわが子を食べる行為は恐怖による攻撃とストレス性の攻撃とが結びついた混合型の攻撃と考えられるのが妥当であろう。

胎児との関係については、主体（母体）と他者（胎児）との関係という枠組みの中で、疎外・分離と同一化の過程を辿っていると考えられる。主体の自我が、胎児に、Kによって利用されようとしているという自身と同じ状態に置かれるという類似点を見出し、その点において典型的な同一視が形成される。食べるという行為によって、胎児を母親の体内に取り入れ、自分自身に同化させる行為と推測される。F・Bの食べる行為は「異物」を亡ぼすというよりむしろ、もともと身体の一部である胎児を体内に取り入れることによって、死と再生が循環すると解釈できるのではな

いか。

【注】

注一　倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』講談社　一九七〇年三月　二九頁

注二　本稿における「婚約」の引用はすべて『倉橋由美子全作品1　パルタイ・雑人撲滅週間』(新潮社、一九七五年一〇月)所収のものによる。

注三　クロノスはローマ神話の農耕神であるサトゥルヌスと同一視され、しばしば老人の姿で表現される。

注四　ロバート・グレイヴズ『ギリシア神話　新版』(高杉一郎訳、紀伊国屋書店、一九九八年九月)五八～六五頁を参照。

注五　ゴヤの「我が子を食らうサトゥルヌス」について、現在は修正されているが、かつてサトゥルヌスの下半身には勃起した性器が描かれていたことがわかっている。このことから、ゴヤはこの作品を通じて、生命の終わりと始まりを象徴的に描いたものだともいわれている。(吉田敦彦『名画で読み解くギリシア神話』(世界文化社、二〇一三年七月)を参照)

注六　前掲注四『ギリシア神話　新版』二四二頁。また、舌が切りとられたのはピローメーラとする一説もある。

注七　ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピア全集　タイタス・アンドロニカス』小田島雄志訳　白水Uブックス　一九八三年一〇月　一六五頁

注八　田村正彦「続・子を食らう餓鬼―図像の流布とその背景―」『古典文藝論叢』一号　二〇〇八年三月　一五頁

注九　アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎ほか訳　大修館書店　一九八四年三月　一一〇頁

注一〇　ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』竹内信夫、西村哲一、アランロシェ、柳谷巌、瀬戸直彦訳　大修館書店　一九八九年一〇月　二六三頁

注一一　テンプル・グランディン　キャサリン・ジョンソン『動物感覚　アニマル・マインドを読み解く』中尾ユカリ訳　日本放送出版業界　二〇〇六年五月　一九二頁

注一二　前掲注一一『動物感覚　アニマル・マインドを読み解く』一九五頁

注一三　前掲注一一『動物感覚　アニマル・マインドを読み解く』一九七頁

注一四　フロイド『自我論』井村恒郎訳　日本教文社　一九七〇年五月　一三七頁

注一五　松岡努「自己愛的同一化と死のイメージについて―安部公房『無関係の死』を素材として―」『駒沢女子大学研究紀要』一七号　二〇一〇年一二月　二四五頁

注一六　前掲注一四『自我論』一三四頁

注一七　前掲注九『イメージ・シンボル事典』六四四頁

注一八　前掲注九『イメージ・シンボル事典』六九七頁